
一日一日がまるでもう大人のような気分でした
～ U S J ! うまいもん・すごいもん・ジャジャジャジャーン! ~

大東市立四条小学校 中野 泰宏

1. はじめに

暖かくなってくると、本校から見える山の景色が一段と華やかになる。「野崎参り」で有名な野崎観音の美しい桜を見て、季節の移り変わりを感じることで本校の子どもたちは、本当に幸せである。

本校は、主体的な「学び」のある魅力的な学校、子ども・保護者・地域の願いの上にとった学校を目指して、「開かれた学校づくり」や「教育改革」に取り組んできた。その大きな柱として、基礎基本の学力保障・人権総合学習・コミュニケーション能力づくりがある。本校が人権総合学習に取り組んで7年になるが、子どもたちの興味や関心を大切に、たくさんの人や価値観に出会わせながら、自らの課題を切り開いていく力を育てていこうという基本的な考え方は変わらない。

5年生のみんなは本当によく遊ぶ。そして、人懐っこさと無鉄砲さもピカイチである。今まで、野崎の山について調べる中で、たくさんの人や生き物に出会うことの楽しさを感じてきた。また、自分の体について調べる中で、自分や自らの生活を見つめることの難しさを感じてきた。

そんなみんなに、世の中にある「うまいもん」や「すごいもん」を支えている人に出会う中で、本物にしかないこだわりやアイデアに生き方を学んでほしい、そして、自分たちの生きるこの町のすばらしさと、自分たちの夢やがんばりを力いっぱい表現していく力をつけてほしいと思った。

2. どっからいこか？

1学期は子どもたちの興味やそれぞれのもつ力を把握するのにとても大切な期間である。できるだけたくさん取り組みを入れて、一人ひとりがキラッと光る場面をつくろうと考えた。

日曜参観でおうちの方と一緒にした「利き米大会」、初めての田植え・稲刈り、「給食を超えるメニューをつくろう!」と始まった「220円ランチ大会」、目の前で職人さんに鯛を下ろしてもらった「おさかな天国」...

みんなが生き生きと活動する様子を見ていて、食べ物を中心にした取り組みを入れていけば、きっとすごいことができると確信した。みんなが住むこの場所にしかない魅力をいっぱい集めて、たくさんのお支えも感じながら、協力して活動できることって、いったい何だ？

3. いよいよスタート!

2学期に入って最初の人権総合の時間に「野崎と言えば?」とみんなに聞いてみた。「野崎観音!」「トメヤン(3年生のときに学習した野崎の民話に登場するいたずらタヌキ)!」「観音参り!」「出店!(?)」など勢いはよかったが、それ以上のものは出なかった。そこで、「この野崎には有名な野崎参りがあるけど、意外に知らない人が多いんだ。もっと有名にして、たくさんの人に野崎のすばらしさを知ってもらえるように、みんなが今できることはない?」と聞いてみた。

「野崎の新しい名物をつくって、野崎参りに店を出そう!」

食べ物にいろいろ興味をもって活動してきたみんなにとっては、このゴールはとても自然なことだった。

「よっしゃー!やるぞー!」と勢いづく子もいれば、「先生、そなんほんまにできるん?」というんなハードルを考えて不安になっている子もいた。しかし、そこに「夢」と「楽しさ」があればそれで

いい。

4．各地の名物に学ぼう

いきなり何もないところから名物をつくるのではなく、「各地の名物に学ぼう」ということになった。一人ひとりが一つの都道府県を決め、インターネットや雑誌などを使って、「これは！」という名物を調べた。それが本当に名物かどうかは、やはり実際に聞いてみないと分からないので、現地に電話で問い合わせた。「インターネットに載ってたのに！」ここでは、メディアで取り上げられていることがすべて本当とは限らないということを学んだ。そのあと、全国を6つのブロックに分け、調べてきた名物について話し合い、各ブロックの「こだわりの一品」を決めた。エントリー作品は次のとおりである。

- ・札幌ラーメン　・もんじゃ焼き　・ます寿司
- ・ふな寿司　・かわらそば　・さつま揚げ

どんな名物にも有名になるまでの長い道のりがあり、支えてきたたくさんの人のこだわりやアイデアがある。ここでは教師が考えていた名物と違うものが出てきたが、つかんでほしいポイントを確認した上で、子どもたちの「こだわりの一品」を進めることにした。

5．うまいもん・すごいもん・ジャジャジャジャーン！

「名物づくりにつかえる決め手を、どれだけ見つけ出せるか？」

何度もつくり直しながら、自然と職人さんの味へのこだわりが気づく子。普段の友だちとのコミュニケーションは下手だが、得意なパソコンを使った作業で友だちとの接点をうまくつくった子。休みがちなため取り組みに少し入りにくくなっている子に、きちんとできることを用意して待ってあげられるまわりのみんな...。「本物を送ってもらえるところは、送ってもらってもいいよ」というと、ほとんどのグループが先方と交渉して本物を送ってもらうことができた。みんな、真剣そのもの。それぞれがもてる力を発揮して、発表会を迎えた。

どうしても言葉を思い出せなくて詰まってしまった子に、友だちがそっと後ろから教えてあげる場面もあり、みんなで名物づくりのポイントを探し出そうという雰囲気の中、発表会が進んでいった。発表会の一番のクライマックスは「ふな寿司」だった。初めて出会う強烈な臭いにざわつき始めるみんな。口に合わず、思わず吐き出してしまおう子。この名物から何を学ぶのか、ほとんどの子が分からない様子だった。しかし、最後にとっておいた手紙が紹介されたとき、全体の雰囲気が一気に変わった。ふな寿司を送っていただいた社長さんの手紙である。真剣に取り組んでいる姿をみんなに見せてあげたいと、先方に電話をかけるときからサポートしておいたある子が読んだ。

「私はふな寿司を通して人の心を生かし、自分も日本一幸せを感じています。生きた心でふな寿司を食べてね。生きた目で見てね。チャレンジ、ありがとう」

「これだ！」と、大きな拍手が起こった。その拍手は社長さんだけでなく、彼にも向けられていた。このときに、みんなの新名物づくりへの気持ちが一段と大きくなったように思う。この発表会で出てきた名物づくりのポイントは次のとおりである。

- ・好きな具　・子どものおやつ　・タレ
- ・2つの味　・きれいな店　・体にいい

6．野崎の新名物コンテスト

今まで学んできたことをフルに使って、一人ひとりが商品のアイデアを考えた。考えていく上での

ポイントを次のとおりにした。

- ・野崎らしさが出ている名物か？
- ・実際に商品として魅力的か？

一人ひとりが考えたアイデアをみんなの前で発表し、「この商品ならいける！」と思った作品に投票した。最終的に作品をまとめることができなかった児童もいたが、みんなでエントリー作品を決めるという目標があるので、しっかり選ぶんやでという雰囲気があった。決まったエントリー作品は次のとおりである。

- ・野崎桜もち ・桜えびもち ・観音ポォーン ・トメヤンホットクッキー

最終的に一つの作品に絞らなければならない。「親子交流でい」という参観の日に、おうちの方や地域の方に審査員をお願いした。みんなが自信たっぷりに作品を売り込んでいく姿は、本当に頼もしかった。しかし、おうちの方も負けてはいない。「それって、本当にできたてを出せるん？」「それで100円ってというのは、ちょっとお客さんをナメてんのとちゃう？」笑いながら出てくる一言がキツイ。これは、もはや「親子交流」ではなく、真剣に新しい野崎の名物をつくらうという、5年生のみんなとそれを支えるたくさんの人たちの思いのぶつかり合いだった。

「このコンテストに勝つことがみんなのゴールやない！みんなの目標のために、一つの作品を選んでもらうんや！」真剣に選ぶ審査員の方々。集計のあいだにはおうちの方がつくってくれた豚汁が、がんばったみんなにふるまわれた。そして、大きな歓声とともに、ついに野崎の新名物として「野崎桜もち」が選ばれた。

「わたしらの作品は落ちたけど、新しい名物が決まってホンマにうれしいねん」

みんな満足そうな顔をしていた。

7．野崎参りに店を出そう！

6年生に入った。すぐに活動を始めるみんな。

職人チームは5年生のときにつくったもち米を使うことは一致したが、実際についた方がいいという意見と、商品のバラつきをなくすためにもちつき機を使った方がいいという意見に分かれたりもした。しかし、それはよりいいものをつくらうとする気持ちの表れだった。

店づくりと場所とりを担当する大工チームは、野崎観音にこれまでの活動も含めてお願いに行った。「学校教育の一環だから、最大限協力させていただきます」と、地元の子ども会と一緒に境内を貸していただけることになった。最高のロケーションに大喜びで帰ってきた。

販売チームは商店街をまわり、気持ちよく買ってもらえる店員の言葉について調べた。たくさんの人の中でも目立つようにプラカード形の看板や、一目で分かる店員用のリボンもつくった。

惜しくも選ばれなかった「トメヤンホットクッキー」からアイデアをもらって、「トメヤン」を紹介する小さな絵本をつくったのはプレゼンチームである。民話の絵本をつくられている方にアドバイスをもらい、お客さんにも興味をもってもらえるようダイジェスト版を考えた。

取材チームは各チームの進行状況や他の人の感想などをインタビューし、新聞にまとめて配った。また、四条中学校区に全戸配布されている「しじょう～笑顔発信～」というしじょうこ地域教育協議会通信の取材を受け、たくさんの人に取り組みの様子を伝えた。

8．保健所で...

出店を前に最高に盛り上がるみんな。最後に、衛生上の許可をもらいに代表の児童と保健所に向かった。今までいろいろアイデアを出してくれてはいたが、なかなか採用されることが少なく、居場所が見つけられていなかった児童である。今まで彼女をうまくフォローしてくれていた友だちもいっし

よに連れて行った。しかし、そこで待っていたのは全国で起こった食中毒の被害状況が書かれた資料と、「子どもたちで生菓子を製造・販売してはいけない」という指導だった。「先生、このこと、どうやってみんなに伝えたらええん…」途方にくれる3人。友だちが言う。「お店の人につくってもらっても、それってわたしがつくったことになれへんのちゃうん…」しかし、その場を救ってくれたのは彼女の一言だった。

「けど、気に入ってくれたらお店で商品として売ってくれるかも知れへんやん。そんなら、うちがつくった野崎桜もちがずっと残ることになるねんで。それって、すごいやん！」

彼女がみんなの真剣な思いを代弁していた。この思いは絶対にあきらめさせてはいけない。子どもを帰した後、すぐに支援をしていただけそうなところをお願いした。

9.そして学年が一つにまとまった！

次の日、すぐに学年で話し合いが始まった。「直前に揚げたらええやん」「薄くして焼いたらええねん」「けど、全くちゃうもんになってまうやん」「ほな、どないすんねん。おいらではつくったらあかんのやろ」息が詰まるほどに重い雰囲気。そこを導いてくれたのが、彼女の一言だった。

「協力してくれる人を探そう！」「今から言うて、協力してくれる人なんておるんか？」「そんなん、言うてみなわからんやん！」「そうや、言うてみなわからんわ！」

最後の望みをかけて、和菓子屋さんを探す子や調理師免許をもっている人を探す子、給食調理員さんをお願いしようとする子。そんなみんなの様子を聞いたPTAのOB・OG会の会長さんが、知っている和菓子屋さんが近くにあると教えてくれた。「協力してもらえるかもしれない！」みんなの思いを背にお願いに行く職人チーム。つくり方を書いた資料やみんなが実際につくった「野崎桜もち」をもって、今までの取り組みを話す子どもたち。黙ってしばらく聞いていたご主人が出した答えは…、「協力させてもらいます」だった。

結果を待っていたみんなの中から大歓声が上がった。

10.「いろいろやってきた総合で一番うれしかった」

野崎参り当日の朝、ステージでは野崎観音の方がお店の紹介をしてくれたり、「しじょう～笑顔発信～」を見た方がたくさんつめかけてくれたりした。お店の様子取材した新聞を見て、遠くからわざわざ来てくれた方もいらっしやった。おうちの方も買えないくらいの反響。「お店屋さんごっこ」ではない、本物の「お店」として認められた証拠である。最終日の3日目には開店前に行列ができて、あっという間に売切れてしまった。「野崎桜もち、本当においしかったよ！」みんなの思いが詰まった1301個の「野崎桜もち」が、見事に完売した。

「いろいろやってきた総合で一番うれしかった。この総合はみんなの協力からできたもの。一生の思い出になると思う」

「一日一日がまるでもう大人のような気分でした」

驚きと充実感、また、これまで支えてきていただいたたくさんの方々の方々の笑顔に胸に、また一つ大きく成長したみんな。みんなで一つのゴールに向かって真剣になったからこそ、自分を再確認し、友だちも温かくシビアに見つめることができた。自分たちが本気でがんばれば、そのことは世の中で立派に認められるということを体で感じた。一人ひとりの出会いをみんなで共有できたことが「学校」の醍醐味であり、この取り組みで培われたものは、浅はかな偏見や差別に負けない力へとつながっていくであろう。やり遂げることができたみんなの力と自信が、一人ひとりを支えているのだ。

これからの人権総合学習では、いろんな価値観に出会っていくことをとおして、平和に向けて自分たちのできることを考え実践していく。この取り組みでの売り上げは、これからの活動のために大切にに使わせていただくことにする。

みんなの「夢」はこれからも続く。